

フランス第三共和政期における ナショナリズムと宗教

— モーリス・バレスのジャンヌ・ダルク受容をめぐる —

田 中 琢 三

モーリス・バレス (Maurice Barrès, 1862-1923) はフランス第三共和政中期にあたる 19 世紀末から第一次世界大戦期にかけて活躍した作家であり、ドレフュス事件をめぐる論争を契機として右翼ナショナリストの代表的イデオログとなり、国会議員として政治活動も行った。バレスと同じロレーヌ地方出身のジャンヌ・ダルク (Jeanne d'Arc, 1412-1431) は、カトリック教会の聖女であるだけでなく、近代フランスのナショナリズムの形成において重要な役割を果たしている。本講演では、バレスのジャンヌ・ダルク受容を検討することによって、この作家におけるナショナリズムと宗教の問題についての考察を行った。

バレスは政治的な演説や評論において、ジャンヌ・ダルクを祖国を守るために勇敢に戦った自己犠牲的な愛国者として称揚し、とりわけ第一次世界大戦期には党派を超えて国を統合する象徴的存在として彼女の名をしばしば引き合いに出している。1920 年には当時国会議員であったバレスによって 5 月の第 2 日曜日をジャンヌ・ダルクの祝日とする法案が議会に提出され、可決されている。また、1874 年にパリのピラミッド広場 (la place des Pyramides) に建立されたジャンヌ・ダルクの騎馬像は、当時の右翼ナショナリズムのシンボルようなモニュメントとなったが、バレスもこの騎馬像に献花するデモンストレーションを何度か行っている。

バレスはジャンヌ・ダルクを題材とした文学作品を発表することはなかったが、その著作には彼女に関する言及が数多く見られる。特に私的な手記『わが手帖』 (*Mes Cahiers*, 1929-1938, 1949-1957) にジャンヌ・ダルクの名はたびたび登場し、バレスの後半生において彼女がブレーズ・パスカル (Blaise Pascal, 1623-1662) とともにこの作家の宗教的な思索の対象となっていたことが分かる。ジャンヌ・ダルクに関するバレスの文章として最もまとまった

ものは『光に包まれた神秘』(*Le Mystère en pleine lumière*, 1926) に収録されたエッセー「ジャンヌ・ダルクの子ども時代」(*L'Enfance de Jeanne d'Arc*) である。ここでバレスはジャンヌ・ダルクが生まれ育った村ドンレミ(Domremy)の異教的な風土に注目してこの聖女におけるケルト的要素の重要性を指摘している。実際、ドンレミの生家の近くには、ケルト人の聖地であった泉や妖精が宿るとされた木があった。このようにジャンヌ・ダルクをケルトと結びつける観点には、エルネスト・ルナン(Ernest Renan, 1823-1892)や、フリードリヒ・シラー(Friedrich von Schiller, 1759-1805)の戯曲『オルレアンの乙女』(*Die Jungfrau von Orleans*, 1801)の影響が考えられる。また、バレスの小説『靈感の丘』(*La Colline inspirée*, 1913)の冒頭で、異教的な精霊が息吹くスピリチュアルな場所のひとつとしてドンレミが挙げられていることも指摘すべきであろう。

他方で、バレスは中世の騎士道を高く評価しており、ジャンヌ・ダルクをその理想的な体现者であるとみなしていた。バレスは第一次世界大戦期の時評において、フランス軍の兵士を中世の騎士のモラルの継承者、騎士道を実践する愛国者として賞賛し、戦地で負傷した若い兵士をジャンヌ・ダルクの戦友であり、彼女の栄光と使命に仕えた若者として称えている。このように、戦時中のバレスは騎士道を引き合いに出して公に奉仕する愛国心を高めようとしたが、第二次世界大戦期の日本においても、楠木正成(1294-1336)らによって体现された武士道を称え、愛国的ナショナリズムを高揚させるという似たようなプロパガンダが行われた。この観点から注目すべきは、『武士道』(*Bushido: The Soul of Japan*, 1900)の著者である新渡戸稲造(1862-1933)が、ジャンヌ・ダルクを崇拜していたことである。彼はアンリ・ベルクソン(Henri Bergson, 1859-1941)と会った際に、敬愛するジャンヌ・ダルクの奇蹟について語り合っている。新渡戸が彼女に心酔していた理由は、君主に対する忠誠心が武士道の精神と一致することや、この聖女の神秘性に惹かれたことがある。ちなみに新渡戸はバレスと同じ1862年に生まれた同時代人であり、『武士道』で二度言及されているドレフュス事件を通じて、おそらくバレスのことを認知していたと思われる。

フランス第三共和政は普仏戦争の敗北によって成立し、第一次世界大戦を経て、第二次世界大戦中に終焉を迎えた。ピラミッド広場に設置された戦闘的なジャンヌ・ダルクの騎馬像は、戦争に始まり戦争に終わったこの時代の愛国的なナショナリズムを具現化したものにほかならない。他方で、教会か

ら聖女に認定されたジャンヌ・ダルクはカトリックの国フランスのシンボルでもあるが、バレスにおいてはキリスト教の枠を超えて古代ケルトの宗教性を帯びたスピリチュアルで神秘的な存在であった。この作家にとってジャンヌ・ダルクは、騎士道を体現した愛国者であるとともに異教的世界への導き手であり、そのような異教性がバレスのナショナリズムを特徴づけているといえる。

*本講演は JSPS 科研費 JP19K00495 の助成を受けたものである。